九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ゲーテの初期『書簡集』にみられる敬虔主義 : 言語の世俗化について (2)

新保, 弼彬
九州大学言語文化部

https://doi.org/10.15017/5377

出版情報：言語文化論究. 6, pp.81-91, 1995-03-10. 九州大学言語文化部
バージョン：
権利関係：

ゲーテの初期『書簡集』にみられる敬虔主義言語の世俗化について（2）

新　保　弼　彬

1．はじめに

本稿は『独仏文学研究』（九大）第44号において同一タイトルのもとに，若きゲーテにおける敬虔主義言語の世俗化形態の解明を目指して始められた連続的な言語分析研究の一環として位置づけられるもので，前回の still に引き続き，今回は voll をその分析の対象として取り上げた。[1] 従って，テキストデータベース『ゲーテ・ファイル』を利用して資料を収集する方法論上の面からいっても，あるいはまた，その資料分析上の側面から見ても上記第1論文の研究方法を基本的にはそのまま踏襲している。[2] ここに再度，本研究が取り扱うそれらの主要課題を項目別に要約すると，およそ次の4点にまとめられよう。

1）『若きヴェルテルの悩み』とA．ランゲンの『語彙集』に共通する554語の敬虔主義の語彙の中から，1語ないしは若干の語を取り上げ，それらがテキストデータベース：ワイマル版『ゲーテ書簡集』第1巻から第5巻中に現れる頻度を調べ，それを各巻毎に表にまとめる。[3]

2）その際，取り上げた語の全用法を，A．敬虔主義本来の意味において用いられているもの，B．敬虔主義的な用法から転じて，世俗的な意味で用いられているもの，C．上記A，B以外の一般的な意味で用いられているもの，というA，B，C，3種類の用法に分類して，それぞれの頻度数を確定し，その結果を一覧表にまとめる。

3）B欄に大別される世俗的用法の典型的な文例を取り上げ，その用法の特色を明らかにすることによって，敬虔主義のことばが辿る世俗化の変遷過程を究明する。

4）こうして得られた分析結果を，『ヴェルテル』の中に現れる同じことばの頻度や用法と比較することによって両者の相関関係を調べ，ゲーテの初期書簡から作品『ヴェルテル』のことばが成立する過程を総合的に解明する。

以上が，今後継続して行われる本研究の主要課題であるが，今回取り上げた voll の場合には，個々の例文を詳細にわたって分析してみると，その用法を上記第2項目に従って，A，B，Cに分類することが極めて困難である用例が多く含まれていることが明らかになった。少なくとも voll に関しては，still の場合のように，明らかに敬虔主義的な用法としてA欄に分類される用例は殆ど見いだされないし，また，BとCとの用法上の差異を明確には限定できない用例も多く含まれている。つまり，取り上げる語彙の種類によっては，still の場合のように単純には，その用法をA，B，Cに分類することができないものがあることを，今後の研究上の課題として先ず指摘しておくべきであろう。

2．ワイマル版『ゲーテ書簡集』第1巻〜第5巻に現れる voll の頻度

上記1）の調査項目に従って，テキストデータベース『ゲーテ・ファイル』により，voll

が，ワイマル版『ゲーテ書簡集』第1巻から第5巻の各巻にどの位の頻度で現れるか調べてみると，下表のような数値が得られる。

第1表　ワイマル版『ゲーテ書簡集』第1巻～第5巻に現れる voll の頻度[4)]

	1巻	2巻	3巻	4巻	5巻	計
頻度数	21	22	11	8	13	75

先ず，第1表から得られる数値の上での結論は，voll が第1，第2巻において43回用いられており，これは全使用総数のおよそ57%に及んでいるということである。このことは何を意味しているのであろうか。それには先ず，第1巻及び第2巻の成立年代に注目しなければならない。第1巻は1764年から71年までの書簡を，また第2巻は1771年から75年までのものを収録している。『ヴェルテル』成立の年が1774年であることを念頭に置くと，この時期に最も近い頃に書かれた書簡を主に収めている第1巻と第2巻中の voll の出現回数が57%という高い数値を示していることは，取りも直さず，それらが作品『ヴェルテル』中の voll の使い方にも少なからぬ影響を及ぼしているであろうとの推測を成り立たしめるのである。以上のことから見ても，この時期の voll の用例に即した，さらに精緻な分析が必要になることはだれの目にも明らかであろう。

ところで，前述したとおり，voll が辿った言語世俗化の過程を明らかにするために，その用法を A, B, C に分類しようとしたが，その試みは still の場合のように，うまくはいかないことが判明した。それは，一つには分類上の基準となるランゲン『語彙集』の voll の用例があまりにも少ないため，客観的な比較基準とはなり得ないことに起因しているのである。因に，『語彙集』によって見出語 voll を見てみると，次のような用例が挙げられているに過ぎない[5)]：voll sein des Herrn und seiner Gnade（主とその恵みに満ちている）; ich bin voll geist und leben（わたしは御霊といのちに満ち溢れている）; mein Herz ist voll und dennoch leer: Voll Liebe, leer von dem, was ich beweinet（わたしの心は満ち溢れていながら，それでいて，空なのです。愛で満ち溢れながら，失ったものを嘆き悲しむ思いでうつろになっています）。しかしながら，こうした数少ない例句を仔細に検討してみると，ランゲンが敬虔主義の文献から収集した voll には，表現上，一定の共通した特徴が明らかに認められる。そのことを明らかにするために，現代においても至極一般的な意味において用いられる形容詞 voll の使い方を取り上げ，それとの比較において敬虔主義的用法の特徴を検証してみることにしよう。

3．voll の一般的語法からみた敬虔主義的用法の特徴

Duden の大辞典（全6巻，Mannheim 1981）によると，voll の意味・用法は大きく3つに，さらには下位区分として8つに分けられている。ここではその中から，敬虔主義的用法の特徴を明らかにする上で必要な4つの意味区分を取り上げることにする。

1）「（人や物がこれ以上入らないほど）いっぱいの」
例句：ein voller Bus; der Saal war voll von Menschen; die Augen voll Tränen など。

2）「（ある感情や性質などで）満ちている」
例句：ein Herz voll Liebe; er ist voll Güte など。

3）「（丸く）ふっくらした」
例句：ein volles Gesicht; der Mond ist voll など。

4）「（数量などが）十分な，完全な」
例句：die volle Summe; drei volle Wochen; ich sage das in vollem Ernst

など。

以上の用例で，voll の持つ今日最も一般的な意味機能はほぼすべてを尽くしているものと思われるが，前章ですでに取り上げたランゲンのいう voll の敬虔主義的用法は，上の4つの意味・用法中のいずれに最も近い特色を示しているのであろうか。ランゲンの上記引用箇所を基にして敬虔主義に固有な voll の用法を定式化してみると，「[人や心や魂など] が [愛や命やある感情などで] 満ち溢れている」という意味機能がその最も本質的な特色をなしていたものと考えられる。つまるところ，Duden にみられる上記4つの意味・用法のうち，第2項目のものが，敬虔主義的語法の最も一般的なものであったと結論づけられるのである。少なくともランゲンがその『語彙集』に挙げている voll の用例に関する限り，この結論は当を得たものだといえよう。

4．新たなA，B分類法による voll の頻度

前述したように，voll の場合には個々の例文に当たって，その用法をA，B，Cに分類することが困難であるとすれば，3章で得られた結論に従って，A欄では，「[人やその心など] が [ある感情や性質などで] 満ち溢れている」という敬虔主義においてよく見られる voll の用例を取り上げ，B欄では，Duden が挙げている voll の4つの意味・用法のうち，第2の意味項目を除外した用例のすべてを取り上げることによって，至極大ざっぱではあるが，敬虔主義的な用例のすべてを拾い上げるかなり有力な分類法を導き出すことができることになる。この観点から第1表を再度分類し直してみると，次の第2表のような結果が得られる。

第2表　『ゲーテ書簡集』第1巻～第5巻に現れるA，B用法別にみた voll の頻度

	頻度数	A	B
第1巻	21	9	12
第2巻	22	12	10
第3巻	11	7	4
第4巻	8	1	7
第5巻	13	3	10
計	75	32	43

さて，ところで次に第2表をもとにして，A欄に分類された voll の用法上の諸特徴を分析する作業に入るわけであるが，その前に先ず『ゲーテ書簡集』第1巻～第5巻中に現れる voll の全用法を，A，B別に分類する上で手掛かりにした若干の例文ないしは例句を挙げ，それらを分類上の基本的な概則として定めておくことにする。その際，自明のことではあるが，B欄に分類される voll の意味・用法の方が多岐にわたっているわけであるから，その分類上の概則から掲げることにしよう。

I　用法Bを分類する上での概則：

1．Duden 大辞典の第1意味項目「(人や物などがこれ以上入らないほど) いっぱいの」に該当する用例

1）便箋などが「いっぱいの」の意味で

J. J. Riese にあてた，1765年10月付の書簡には次のような1例が出ている。[6] Ich sehe, daß mein Blat bald voll ist und es stehen noch keine Verse darauf (W I 15).

(もう直ぐ便箋はいっぱいになりますが，まだぼくの詩は載せていません。)

2）「頭 [手] いっぱいの」などといった成句的な表現で

第1巻に現れる例としては，die Ohren

voll (W I 117); den Kopf voll (W I 125), 第3巻中には, ich habe heute die Haut voll zu thun (WIII 132), 第4巻中には, so hat man alle Hände voll zu thun (WIV 192) などが同種の用例として現れる。

3) die Augen voll Tränen や. . . ist voll von. . .などの形式で

第1巻には, ausgestreckte Hände voll Sehnsucht (憧れに満ちて差しの延べられた手) (W I 45) という用例が見られる。

. . . ist voll von. . .の形では, 第2巻に, er ist voll süsen Weins (WII 173), また, 第5巻には, die Welt ist voll Thorheit, Dumpfheit, Inconsequenz und Ungerechtigkeit という用例が見いだされる。

2. Duden 大辞典の第3意味項目「(丸く) ふっくらした」に該当する用例

この意味で用いられている voll の用例は, 1, 2, 3巻中には見いだされず, 専ら, 第4巻中に, der volle Mond (WIV 95 など) の形で3回現れる。

3. Duden 大辞典の第4意味項目「(数量などが) 十分な, 完全な」に該当する用例

この意味では, 第1巻中に, drei volle Wochen (W I 183), 2巻中には, volle Zeit (WII 27); es dauerte von ein Uhr bis vollen Tag (WII 61) の形で現れている。

II 用法Aを分類する上での概則:

ここでは, 前述した通り, ランゲン『語彙集』の敬虔主義的な voll の用法を分析, 定式化したものが, Duden 大辞典の意味分類をもとにして立てた4つの用法のうち, 第2意味区分「[ある感情や性質などで] 満ちている」に最も近似していることをその有力な根拠として, この種の用例は一応すべて例外なくA欄に分類することにした。つまり, 簡単に言えば,「[人の心や思い] が [様々の喜怒哀楽の感情で] 満ちている」ことを表現している voll の用例は, すべてこの範疇に属するものとして取り上げられている。しかしながら, 全5巻に現れるこの種の voll の用例を細部にわたって分析すると, その用い方の形式には, 次のような幾つかの共通した類型が認められる。

1. Herz や Freude などの名詞を直接形容する語として付加語的に用いられている用例

第1巻中では, ich habe diesen Verlust mit einem vollen Herzen empfunden (W I 254) という文中にその典型的な用例がみられる。

2.「Herz や Seele などが悲しみや苦悩に満ちている」という表現にみられるように, . . . ist voll von. . . (または. . . ist voll. . .) という構文をとり, 述語的に用いられている用例

第1巻に現れる, da wird mein Herz von Jammer voll (W I 44) のような表現は, 2巻, 3巻において, さらに多く見られるようになる。

3. Bの用法においてすでにみられた, die Augen voll Tränen に類する用例であるが, voll の後に,「希望」とか「憧憬」といった抽象名詞が置かれることが多く, こうした表現は, どちらかと言うと,『書簡集』の3, 4巻に多く現れる。第3巻中からその1例を挙げると, ein Blick voll Hoffnung Erfüllung und Verheisung (WIII 45) などがその最も典型的なものであろう。

以上, voll の用法をA, Bに分類する上での概則について詳述したが, 再度第2表に戻って, A欄に分類された多少とも敬虔主義的な色彩を帯びているものと考えられる voll が, 各巻に現れる頻度の推移を見てみることにしよう。そこからどのような傾向が窺えるであろうか。先ず全体的に見て, 次の3点に注目

すべきであろう。

1．ワイマル版『ゲーテ書簡集』に現れるA欄該当のvollの頻度は，第1巻では9回，第2巻では12回，第3巻では7回となっているところからも明らかなように，この種のvollは，第1巻から3巻までにかなり集中して現れる。

2．中でも，第2巻における頻度数が最も多くなっている。

3．それに較べて，第4巻では1回，第5巻では3回と，その出現回数が急激に減少している。

以上の3点を踏まえながら，こうしたvollの全体的な出現傾向の背後にある個々の用例に立ち入って分析し，この種のvollの用法に共通する特徴が果たしてどのような点にあるのか，さらにはまた，それらの特徴と上に指摘した全体的な傾向との間には何らかの相関性が認められるのか否か，以下に，その個別例の具体的な分析を試みることにする。

5．用法Aに分類されたvollの各巻における用例分析

以下に全5巻に現れるvollの用例を各巻毎に見ていくが，その際考察の対象として取り上げるものは，われわれの研究課題からして明らかなように，飽くまでも敬虔主義的な要素の多少とも認められるものを始めとして，さらには，そこから派生し世俗的な意味に転じて用いられるようになったような用例にのみ限定していることを予め指摘しておかなければならない。

1．第1巻に現れるvollの用例分析：

1）この巻に現れる9回の用例中，敬虔主義に固有な「心が……に満ちている」という形式に当てはまる表現は，ゲーテが早くも1766年，ライプツィヒから友人J. J. Rieseにあてて書いた手紙の中に見いだされる。当時ヨーロッパでは書簡の中に散文詩を挿入するロココ風の様式が好んで用いられていたが，ゲーテのこの書簡もそのような形式を踏襲している好個の例であるといえよう。いや，むしろ，専ら散文詩によって構成されている書簡だと言った方がよい。問題の箇所は，ライプツィヒにきてまだほどない頃の，淋しさのいまだ去りやらぬ心境を詠んでいる詩の冒頭に現れる。

> [. . .] und wenn ich fühle daß ich vergebens seufze
> Da wird mein Herz von Jammer voll,
> Mein Aug wird trüber [. . .] (W I 44)
> (友を探しても見つからず，ため息まじりの空しさを感じるとき，
> ぼくのこころは，嘆きに満ち，
> ぼくの目は曇り，……)

この詩の成立時期が，ゲーテの敬虔主義体験以前に位置していることを考えると，「ぼくのこころは，嘆きに満ち」という表現をもって直ちに，ピエティスムスの影響を云々することは早計と言わなければならない。むしろ，ロココ文学にもこうした表現様式が広く流布していたものと考えた方がよいであろう。そのいずれの影響によるものか，最終的な判断を下すには，今後データベースを利用した，この時代の広範な文学作品の語彙分析の成果に俟たなければならない。

2）これに対して，ゲーテが1771年2月，母方の祖父の死に際して，祖母A. M. Textorあてにシュトラースブルクから送った手紙には，悲しみにかき暮れる祖母を慰めようとする切々たる哀感が漂っているが，この書簡の底流にあるものは，60年代末のあのクレッテンベルク体験を経ている直後だけに，敬虔主義的な死生観であったといえよう。それだけに，随所に聖書やピエティスムスのことばがちりばめられている。ゲーテが，「最も悲しむべき出来事も先慮の御手に導かれれば，最も好ましい至福に転ずるでしょう」と述べると

き，それは，ローマ書8章28節のことばに依拠しており，ここで用いられている“Vorsicht”(先慮)ということばにも，敬虔主義者Jung-Stillingの影響が感じ取られる。さらにゲーテはことばを進め，祖父はいま，「永遠の安息日の憩い」(die ewige Sabbaths Ruhe)についていると語るが，このSabbatsruheもランゲンの『語彙集』に採り上げられている。この手紙全体の醸す宗教的，敬虔主義的霊気に即して考えると，冒頭で発せられる以下の一文中のvollの用法も，断定的には言えないまでも，恐らく若きゲーテの脳裏に蓄えられていた敬虔主義の語彙の中から取り出され，用いられたものではないだろうか。Ich habe diesen Verlust mit einem vollen Herzen empfunden (W I 254).(ぼくはお祖父様を亡くしたこの悼みを胸いっぱいに感じ取っています。)

第1巻中では，以上見てきたように，この1例のみが敬虔主義的用例として確認されるものであるが，第2巻になると，vollとHerzを組み合わせた同種の表現が俄に増える傾向が認められる。

2．第2巻に現れるvollの用例分析：

1）1771年秋，ヘルダーにあてた手紙には，次のようなvollの用例がみられる。

> Ich übersetze Stückchen aus dem Ossian, damit ich auch den aus vollem Herzen verkündigen kann (W II 5).
>
> (ぼくはオシアンの詩の中からほんの一部を翻訳しています。自分でもそれを，満ち溢れる心の底から，語り伝えることができればと思うからです。)

この箇所は，すでにこの頃作品『ヴェルテル』の素材として“Ossian”の受容が始まっていたことを示唆するもで，注目に値するが，まさにこの作品との関連において興味深いのは，新たなオシアンの到来を語り伝える若きゲーテの告知者としとのパトスが，aus vollem Herzenといった一句に込められている点であろう。同じ表現は，同年の暮れ，同じくヘルダーにあてた書簡中でも用いられている。

> Vor wenigen Tagen hab ich Sie recht aus vollem Herzen umfaßt, als säh' ich Sie wieder und hörte Ihre Stimme (W II 12).
>
> (数日前ぼくは，まるであなたと再会し，そのお声を耳にしているような心地がして，満ち溢れる思いであなたを心に抱きました。)

2）1772年11月10日，J. C. Kestnerにあてて出された手紙になると，Herzを修飾する形容詞にはvollのみならず，他のganz, warmなども加わって，その真心の込め方は幾重にもその深まりを見せている。

> Ich gestehs Ihnen es war mir halb angst, denn das Unglück ist mir schon offt wiederfahren. Ich kam mit ganzem, vollem, warmem Herzen, lieber Kestner da ists ein Höllenschmerz wenn man nicht empfangen wird wie man kommt (W II 36).
>
> (ぼくはあなたに，半ば不安な気持ちだったことを告白いたします。といいますのは，ぼくはこれまでにもよく不運な目に遭ったことがあるからです。真心から，心あたたまる思いに満ち溢れ，帰ってきたというのに，ケストナー君，出迎えてもらえないようなことがあれば，地獄の苦しみなのです。)

ここで用いられているmit ganzem, vollem, warmem Herzenという，いかにも感情を誇張した表現が，これらと全く同じ形容詞を多用する小説中の主人公ヴェルテルの感情表出法と酷似した面があることを考えあわせると，『ヴェルテル』における形容詞ganz, warm, vollの用い方は，どうやらこの辺りから顕著に現れてくるゲーテの書簡文体の一特徴をなすものであったと言えるのではないだろうか。さらにganzやwarmもまたランゲ

ン『語彙集』には，敬虔主義のことばとして挙げられていることを見ても，上記引用のganz, voll, warmの3語を重ね合わせた表現には，やはり敬虔主義的語法の特徴が相当に兼ね備わっていたものと推測されよう。

また，この頃vollやwarmが高揚した感情表出のための形容詞として，しばしば対をなして用いられていたことは，ヴェルテルのモデルといわれるイェルーザレムの自殺の報を，1772年11月，S. v. La Rocheに対して詳細に伝えているゲーテの次の書簡中の言い回しによっても裏付けられる。

> Hundertmal freuen wir uns im Geiste nach über die Augenblicke die wir in Gegenwart der schönsten Natur in dem seeligsten Zirkel genossen. Mad. Merck empfand die volle Wärme Ihres Briefs [. . .] (WII 40)
>
> (私たちは後から心の中で振り返って，あのいとも妙なる自然を前にして，この上なく幸せな仲間たちとともに味わったあの一時のことを幾度も幾度も楽しんでいます。メルク夫人はあなたのお手紙に溢れている温かさに感じいっていました。)

3）『ヴェルテル』上梓前年の，1773年4月10日，ゲーテはJ. C. Kestnerにあてた手紙の中でも，上記引用の書簡中にもみられる「あの一時」(die Augenblicke) と同種の表現を繰り返しながら，その心が，「えも言われぬ一時に」(vom wunderbaren Augenblick) に満たされた様を次のように描写している。

> Dass auch am schönen hohen Sternen Abend ganz mein Herz voll war vom wunderbaren Augenblick da ich zu'n Füßen eurer an Lottens Garnirung spielte, und ach mit einem Herzen, das auch das nicht mehr genießen sollte, von drüben sprach (WII 76).
>
> (空高く星の瞬く美しい夕方になってからも，ぼくの心はあのすばらしかった一時，あなたがたの足元でロッテのまとっている衣装の飾り物を玩びながらも，ああ，それでいてその感触を楽しむようなことがあってはならないと心に言い聞かせながら，向このこと（あの世）について語り合ったあのすばらしい一時のことでぼくの胸のうちは満ち溢れておりました。)

ロッテの飾り物を玩ぶゲーテの手に伝わってくるえも言われぬ感触，だが，それとはおよそほど遠い永遠の重みをもった来世の話題，刹那的な官能の歓びと死後の恒常的な世界が交錯する瞬時の幸福に酔いしれるゲーテのこの心情描写は，この三者の位置にヴェルテルとロッテとアルベルトを入れれば，そのままあの小説の世界の月明りの静かな夜の情景描写を思い起こさせずにはおかない。そこにおいてもまた死後と死者の世界，いまは亡き母親への追慕の情が語られる。つまりゲーテは，ヴェルテル成立直前に実際にKestnerにしたためた手紙の中で，まさしくこのようなヴェルテル的心情の吐露を行っているのであって，しかもそれが，ここにみられるような，“. . . ganz mein Herz voll war von. . .”という表現様式によって見事に言い表されているのである。

4）ゲーテは1774年6月1日から7月4日までG. F. E. Schönbornあてに書き綴ってきた手紙の中で，初めて『若きヴェルテルの悩み』に触れ，その主人公の性格描写を行っているが，とりわけ7月4日付の文面には，Lavaterの人柄を評するのに，vollが2度用いられており，『ヴェルテル』成立期のvollの用法を知る手掛かりとして興味深いものがある。その一つは直接Lavaterの性格に関するもので，次のように述べられている。

> In seinem Elemente ist er unermüdet thätig, fertig, entschlossen, und eine Seele voll der herzlichsten Liebe und Unschuld (WII 175).
>
> (彼の性格の本領は，倦まずたゆまず活動的

で，何事にもすぐてきぱきと対応でき，その心は真にあたたかい愛と純真さに溢れています。)

さらにゲーテは，ことばを継いでLavaterの語り口の特徴についても触れ，次のように褒めそやす。彼がその魂の奥深く刻まれた愛と真情を込めて語るとき,「一切の決まり文句(Terminologie)を打ち捨てて，その心に満ち溢れるものを語る(aus vollem Herzen spricht)」(WII 176)のであるから，その話を聞く者は,「自分にとっても未知の世界であった己の心の隅々までもわかるようになる」というのである。

ここでいま一度，第2巻の用例分析中，最初の書簡においてゲーテがオシアンの詩の新たな到来を告げる告知者として，自らの翻訳を「満ち溢れる心の底から述べ伝えたい(aus vollem Herzen verkündigen)」と語ったことを想起すると,『ヴェルテル』完成直後のゲーテが今また,「聞く者たちに，自分でも知らなかった己の心の隅々までもわからせる」ほどに,「心に満ち溢れるものを語る(aus vollem Herzen sprechen)」Lavaterの直接的な感情表現に限りない共感を覚えているところからしても，今ここに新たに登場した小説の主人公ヴェルテルの，その激越なパトスに動かされて語る新しいことばも,「みなぎり溢れる心から(aus vollem Herzen)」じかに発せられたことばであることを，ゲーテは何よりもこの作品によって表現しようとしたのであることは疑いを差し挟む余地のないほど明らかなことであろう。1771年から74年にかけて書かれた書簡の中で2度用いられている，aus vollem Herzen verkündigen(ないしはsprechen)という，一見至極単純なように見受けられるこれらの表現には，こうした『ヴェルテル』の作品全体を貫く主題が盛られていることが確認されるのである。

3．第3巻に現れるvollの用例分析：

第3巻において用法Aに分類されるvollは7例で，第2巻の12例に較べると減少傾向を示している。しかも7例のすべてが，Stein夫人にあてて書かれた手紙の中で用いられていて，その6例までが1776年の書簡に集中しており，ただ1例のみが1777年の手紙に現れる。またvollが「何によって満たされるのか」，その対象となるものも，第2巻中のvollにみられたものとは異なり，voll frohen Gefühls der Zukunft (III 25); voll Danks gegen dich Engel des Himmels (III 33); ein Blick voll Hoffnung Erfüllung und Verheisung (III 45); voll Sehnsucht (III 114)など，希望，成就，約束，感謝，憧れの念に満たされるといったように,「未来の喜ばしい感情」をその主な内容とする表現になっており，それらは一にかかって，神々しいばかりに神格化されたStein夫人へ寄せる恋情に由来するものと考えられよう。従ってそこには，充溢する心からほとばしり出る魂の叫び，激情の表現は影を潜め，それに代わって落ち着きのある未来への期待感が言い表されているのである。

4．第4，第5巻に現れるvollの用例分析：

第2表からわかるように，A欄に分類されるvollの用例は，第4巻では1例，第5巻では3例のみとなり，その出現回数は急速に減少する。またその用例を仔細に検討してみても，特に敬虔主義ないしはその世俗化の用法を思わせるものは見当たらない。第5巻に1例だけ，ゲーテは1781年，画家F. Müllerあてに書いた書簡中で，その画題をめぐり次のようなvollの使い方をしている。

[. . .], als daß der Heilige, noch voll von dem anmuthigen Gesichte des gelobten Landes, entzückt verscheidet und Engel ihn in einer Glorie wegzuheben beschäftigt sind (V 141).

(聖徒モーセが約束の地の優雅な姿にまだうっとりと見とれながら息を引きとり，天使たちがその彼を天の栄光のうちに引き上げ

ようと必死になっている以外には……）

このvollの用法は題材が聖書であるだけに，一見宗教的，敬虔主義的な色彩を帯びた表現とも考えられようが，しかし，vollの一般的な用法の範疇に入れても少しもおかしくないのである。

6．まとめ

以上ワイマル版『ゲーテ書簡集』第1巻～第5巻に現れるvollを総合的に見てきたが，その分析結果を，最後に作品『ヴェルテル』に現れるvollの頻度並びにその用法上の特徴と比較することによって，ゲーテの初期書簡と『ヴェルテル』におけるvollとの間にはどのような相関性が認められるのか，あるいはまた両者の用法には何らかの共通点が見いだされるのか否か，それらの点を明らかにして本論の締め括りとしたい。

それには先ず，テキストデータベース：ハンブルク版『ゲーテ・ファイル』により，作品『ヴェルテル』にみられるvollの頻度を，第2表作成の際と同様の操作により，用法A，B別に分類してみると，次の第3表のような結果が得られる。[7]

第3表　『ヴェルテル』に現れるA，B用法別にみたvollの頻度

頻度総数	A	B
21	15	6

第3表から，『ヴェルテル』中のvollの頻度総数21回に占めるAの用法の割合は，およそ70%に達していることが判る。これを第2表の各巻毎のA欄の頻度と単純に比較しても，ワイマル版『書簡集』の第2巻におけるvollの用法が，『ヴェルテル』のこの使用傾向に最も近い値を示していることが明らかになる。このことは，第2巻所収の書簡が1771年から75年にかけてのものであり，『ヴェルテル』成立に最も近い年代に位置していることを考えれば，至極当然の結論だといえよう。しかも，先に見たとおり，第3巻，4巻，5巻と時代的な隔たりが進むにつれて，A欄に分類されるvollの数は急速に減少していくのである。

また，vollの用法上の特徴についても，すでに考察した第2巻に現れるものと『ヴェルテル』中のものとを比較してみると，両者の間には表現上，かなりの類似性が認められるようである。紙幅の都合でその詳細については，また別の機会に論ずることとして，ここではその最も代表的なものを2例挙げておこう。

1．7月1日付の手紙には，ロッテとともに老牧師を訪ねたヴェルテルが「不機嫌について」論じる場面が描かれているが，フリーデリーケの目に浮かんだ涙を見て，感動したヴェルテルはその時の心境をこう綴っている。[8]

Mein ganzes Herz war voll in diesem Augenblicke; die Erinnerung so manches Vergangenen drängte sich an meine Seele, und die Tränen kamen mir in die Augen (H 34).

（この瞬間ぼくの胸じゅうがいっぱいになった。過去のいろいろな思い出がぼくの魂に迫ってきて，目には涙がこみあげた。）

ここで用いられている一文，“Mein ganzes Herz war voll in diesem Augenblicke”は，1773年，ゲーテがKestnerにあてて送ったあの書簡中の一文，“Dass[...] ganz mein Herz voll war vom wunderbaren Augenblick [...]”と微細な点に至るまで極めて類似した表現形式をとっていることが窺えよう。

2．『ヴェルテル』8月18日付の書簡には，喜びの源泉であった自然が恐るべき悩みをもたらすものへと豹変する苦しい胸のうちが次のように描かれている。

Das volle, warme Gefühl meines Herzens an der lebendigen Natur, das mich mit so vieler Wonne überströmte, [...]

wird mir jetzt [. . .] zu einem quälenden Geist (H 51).
(生き生きとした自然へ寄せるぼくの心の満ち満ちた，あたたかな感情は，ぼくを様々の歓喜で溢れさせてくれたのに，いまでは……ぼくを苦しめる霊になっているのです。)

ここでも，心に満ちている感情が，voll, warm という形容詞の重層的な使用によって極度に強められて表現されているだけに，それが逆転するとき，それは耐え難い苦しみの極みとなることを，見事な対照的手法によって描き出しているが，この種の表現の原型は，1772年，同じく Kestner にあてて書かれた手紙の中にすでに見いだされる。あの箇所の一文はこうであった。"Ich kam mit ganzem, vollem, warmen Herzen, lieber Kestner da ists ein Höllenschmerz [. . .]"以上の2例からも，主に『書簡集』第2巻中の voll の用法と，小説『ヴェルテル』におけるそのことば遣いとの間には，かなり緊密な相関性があることが判るであろう。

全体的に見て，A欄に分類される voll の出現回数は『書簡集』第1巻，2巻，3巻においてその殆どすべてを占めており，とりわけ，『ヴェルテル』成立前後に最も近い時期に書かれた第2巻中の書簡に一番多く用いられ，また，その個々の用例についても感情表現の強さや表現形式の上からいって，両者の間には極めて類似した側面が窺えるようである。voll の場合には個別的に見て，明らかに敬虔主義的なものから世俗的用法へと向かう過程を類型的に示しているような用例にはさほど出合わないものの，以上見てきたように，敬虔主義体験の直後に最も近かった70年代前半の書簡と『ヴェルテル』との間に確認される総体的類似性は，全体として，この年代の書簡から作品『ヴェルテル』へ向かう過程で行われた voll の世俗化の傾向を推測させるに十分な根拠となり得るであろう。

注

1）新保弼彬「ゲーテの初期『書簡集』にみられる敬虔主義言語の世俗化について（1）—ゲーテ・テキストデータベース利用に関する一試論—」『独仏文学研究』（九州大学独仏文学研究会発行）第44号（1994），59—77頁。

2）本研究において利用したテキストデータベースは，前回同様，1994年5月19日，九州大学樋口忠治教授の手によって完成した『ゲーテ・ファイル』書簡集50巻中，第1巻—第5巻である。なお，この『ゲーテ・ファイル』の完成については，九州大学大型計算機センター『広報』Vol. 27, No. 4 1994, 364—367頁参照。

3）ここに掲げた554語という語彙数は，Martina Schwanke が独自のコンピュータ操作によって『ヴェルテル』の語彙総数4,265語とランゲンの『敬虔主義語彙集』載録語彙総数2,890語を比較して抽出した，両者に共通する語彙総数である。詳細については，下記の原著を参照のこと。Martina Schwanke: Name und Namengebung bei Goethe. Computergestützte Studien zu epischen Werken. Kiel 1991, S. 135.

4）『ゲーテ・ファイル』検索上の問題点として，次のことに留意しておく必要がある。見出語 voll を検索した場合，語形 voll-を含む単語 vollkommen, vollenden などがすべて取り出される点である。第1表の数値は，これらのものを当初より除外したものであることを付記しておく。

5）August Langen: Der Wortschatz des deutschen Pietismus. Tübingen 1954, S. 24.

6）以下，ワイマル版『ゲーテ書簡集』第1巻，2巻，3巻，4巻，5巻から引用したものにつ

いては，その巻数及び頁数を，それぞれ本文引用箇所の末尾に，（WⅠ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ，Ⅴ頁数）の形式で記入している。

7）本来であると，『ヴェルテル』の初稿に基づいて voll の頻度を調査すべきであるが，今回は，樋口忠治教授作成，ハンブルク版『ゲーテ・ファイル」を利用した。

8）以下，ハンブルク版『若きヴェルテルの悩み』第6巻から引用したものについては，その頁数を，それぞれ本文引用箇所の末尾に，（H頁数）の形式で記入している。